

メディアに踊らされる女性

坪谷 ※※
※※ TSUBOYA

中京大学現代社会学部現代社会学科
学籍番号

1. はじめに

ここ数年の間にマスコミによく使われることば・・・「アラフォー」、「アラサー」、「負け犬」、「婚活」。このように未婚の女性を分類するような言葉が目立つ。どちらかという、未婚者を下にみている言い方だ。実際、現代の女性は結婚について意識している人が多い。果たして、これらの言葉が使われるまで、女性は結婚についてそこまで意識していたのだろうか。そして、これらの言葉が生まれたきっかけは？流行語にもなるこれらの言葉の影響とは？

確かに、最近の20代後半～40代の未婚女性が、負け犬だ、結婚だ、婚活だと騒いでいるのは確かである。しかし、これらの言葉が流行するにあたって、結婚率は上がっているのだろうか。婚活パーティーや、お見合いパーティーなど、出会いの場は増えたが、女性の社会進出が増えたのも確かであり、現代の女性の男性に対する結婚条件もレベルが上がってきたように思える。結婚よりも仕事、結婚するなら、自分より年収が高い人、結婚しても仕事は続けたい、しかし家庭に入ってほしいという考えの男性も多いから、結婚はできない。このように、結婚に対する意識も高まる裏で、結婚への障害も増えている。だから、私は実際には結婚率は上がっていないと仮定する。しかし、少子高齢化のままだと、日本が危ないことも事実である。だから、少子高齢化社会を打開するために、結婚率を上昇させるための方法、それについてメディアができることを調べていきたいと思う。

2. 日本の現状

i. 高齢化社会の現状

平成21年10月の時点で、日本の総人口は1億2751万人。前年よりも18万人減少している。そのうち、65歳以上の高齢者は2901万人で、過去最高人数を記録した。つまり、総人口における65歳以上の高齢者の割合は、22.7%である。年々、総人口は減少していくが、高齢者の割合は増加傾向にある。この現状がこれから先も続いていくと、2055年には高齢者の割合が40.5%になり、2.5人に1人が65歳以上の高齢者ということになる。

このように高齢者が増加した原因は、平均寿命が延びたことにある。1955年には、男性の平均寿命は63.60歳、女性は67.75歳であった。しかし、2008年の時点で、男性79.29歳、女性86.05歳を記録した。男女とも、大きく寿命が延びていることが分かる。このままだと、平成67年（2055年）には、男性の平均寿命が83.67歳、女性の平均寿命が90.34歳にまで延びることが予想されている。平均寿命が延びた1番の原因は、医療の進歩にある。また、食生活が改善されたことや、衛生環境が改善されたことも挙げられる。人間の平均寿命が延びることは、喜ばしいことである。しかし、そのおかげで高齢者の割合がどんどん増加しているのだ。

ii. 少子化社会の現状

また、日本の少子化も問題になっている。15歳未満を年少者とする。平成21年10月の時点で、日本の総人口における年少者の

割合は、13.3%で、高齢者の割合を大きく下回っていることが分かる。年少者の割合も年々減少傾向にあり、第2次世界大戦後には、日本の総人口の35.4%を年少者が占めていたのである。なぜこれほどまでに年少者が少なくなっていったのか。

その答えを見つけるために、日本の出生率をしらべてみた。まず、合計特殊出生率というものがあり、それは1人の女性が一生の内に産む子供の平均数を示す。1947年（昭和22年）は、最高の出生率を出しており、第1次ベビーブームといわれた。その時の合計特殊出生率が4.54%。つまり、1人の女性が一生の内に約4~5人の子供を産むということである。今の時代にこれだけの子供がいる家庭は、多くはないが、当時の平均が4~5人であったのには驚きである。そして、2008年（平成20年）の合計特殊出生率は、1.37%。1947年の4.54%と比べると、大幅に減少している。この60年間の間に、増減を繰り返しながらも、確実に出生率は低下しているのだ。また、2008年の出生数は109万1156人に対して、2008年の死亡数は114万4000人。このデータだけを見てわかるように、この年だけでも日本の人口は約5万人減少しているのである。なぜ、ここまで出生率が下がってしまったのか。

iii. 出生率低下の原因

出生率が低下した理由、それは婚姻率の低下であると予想できる。婚姻率とは、人口千人に対する、1年間の婚姻数のことである。前に、1947年が第一次ベビーブームと記したが、その時の婚姻率を調べてみた。その時の婚姻率は12.0。そこから婚姻率は徐々に低下していき、2008年には5.8を記録している。この約60年の間に、婚姻率が半分以上低下したのである。このまま結婚しない人が多いのか、生涯未婚率を調べてみた。1950年の男性の生涯未婚率は、1.45%、女性は1.35%。当時と比べて、2005年のデータによると、男性が15.96%、女性が7.25%という結果になった。男女とも大幅に生涯未婚率が上がっている。これには驚きだ。さらに、平均初婚年齢を見てみると、1993年の男性の平均は28.4歳、女性は26.1歳であるのに対して平成20年になると、男性の平均が30.2歳、女性の平均が28.5歳であった。平均初婚年齢も上昇している。確かに、最近はさらに身近なところでも晩婚化がささやかれている。芸能人の中でも、未婚率は上がっており、40歳を越してから結婚をよく目にする。同時に離婚という文字もよく目にするようになったと思う。そこで離婚率の推移も調べてみた。離婚率とは、人口千人に対して1年間で離婚した数のことである。その離婚率は、1950年の時点で1.01であった。しかし、2008年になると、約2倍の1.99に上がっていた。離婚も年々増えてきているのである。未婚率の上昇とともに、晩婚化や結婚しても離婚する確率の増加で、子供を作る人が減り、出生率が低下し、少子高齢化社会が発展した、ということだろうか。そうなると、若者の婚姻率を上げ、離婚もおさえる必要がある。そのためには、まずこうなった原因を探りたい。

IV. 婚姻率の低下

まず、なぜ結婚をする人が減ってしまったのか。前述したように婚姻率も低下し、結婚したとしてもそれなりに年齢を重ねてからの人も多く、さらには1回も結婚しないで人生を終える人の割合まで増えているのだ。なぜこのような現象が起きているのか、現代社会の若者は結婚に対する意識が薄いのであろうか。2005年に、18歳~49歳の主に20台を中心にとったアンケートのデータを紹介します。1982年時で、「いずれ結婚したい」と思っている男性は95.9%、女性では94.2%であり、男女とも高い結婚意識を持っていたことが分かる。しかし、2005年時には男性87.0%、女性90.0%であった。20年前よりも結婚意識が下がっていることが分かる。また、「一生結婚するつもりはない」と答えた人が、1982年の男性で2.3%、女性4.1%であったのに対し、2005年では男性7.1%、女性5.6%にも上がっている。